

鈴木三重吉

千鳥





千

鳥



千鳥の話は馬喰ばくろろうの娘のお長で始まる。小春の日の夕  
 方、蒼ざめたお長は軒下へ蓆むしろを敷いてしよんぼりと坐  
 っている。干し列べた平莖ひらくきには、最早糸筋ほどの日影も  
 ささぬ。洋服で丘を上あがって来たのは自分である。お長は  
 例の泣きだしそうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、  
 そして襷たすきがけの真似は初やがこと。その三人ともみん  
 な留守だと手を振る。頤あごで奥を指ゆびさして手枕をするのは  
 何のことか解らない。藁わらでたばねた髪ほつの解ほつれは、搔かき上

げてもすぐまた顔に垂れ下る。

座敷へ上つても、誰も出て来るものがないから勢はずみがない。廊下へ出て、のこのこ離れの方へ行つて見る。麓ふもとの家で方々に白木綿を織るのが轡くつわむし虫が鳴くように聞える。廊下には草花の床とこが女帯ほどの幅で長く続いている。二三種の花が咲いている。水仙の一と株に花床が尽きて、低い階段を拾うと、そこが六畳の中二階である。自分が記念に置いて往つた摺すりえ絵が、その儘ままに仄ほのぐら暗く壁に懸っている。これが目につくと、久し振りで自分の家うちに帰つて来でもしたように懐しくなる。床の上に、小さな花瓶に

龍胆りんどうの花が四五本挿してある。夏二た月の逗留の間、自分はこの花瓶に入り替りしおらしい花を絶やした事がなかつた。床の横の押入から、赤い縮緬ちりめんの帯上げのようなものが少しばかり食はみ出している。一寸引っ張って見るとすうと出る。どこまで出るかと続けて引っ張るとすらすらとすっかり出る。

自分はそれを幾つにも畳んで見たり、手の甲へ巻き附けたりしていじくる。後には頭から頤へ掛けて、冠の紐のように結んで、垂れ下ったところを握ったまま、立膝になつて、壁の摺絵を見つめる。「ネイシヨンス・ピク

「チュア」から抜いた絵である。女が白衣の胸にはさんだ一輪の花が、血のように滲にじんでいる。目を細くして見ていると、女はだんだん絵から抜け出て、自分の方へ近寄って来るように思われる。

すると、いつの間にか、年若い一人の婦人が自分の後に坐っている。きちんとした嬢さんである。しとやかに挨拶をする。自分はまごついて冠を解き捨てる。

婦人は微笑ほほえみながら、

「まあ、この間から毎日毎日お待ち申していたんですよ。」とさう。



「こんな不自由な島ですから、ああはおつしや仰おつしやつてもとうとお出で下さらないのかも知れないと申しまして、しまいにはみんなで気を落していましたのでございませすよ。」

と、懐かしそうに言うのである。自分は狐にでもつままられたようであった。丘の上のひと一つ家のや黄昏たそがれに、こんな思おもいも設けぬ女おんなの人がのこりと現れて、さも親しい仲なかのようように対して来る。かつて見も知らねば、どこの誰たれという見当もつかぬ。自分は只もじもじと帶上おびを畳たたんでいたが、

やつと、

「おばさんもみんな留守なんだそうですね。」とはじめ

て口を聞く。

「あの、今日は午過ぎから、みんなで大根を引きに行つたんですの。」

「どの畠へ出てるんですか。——私一寸行って見ましよう。」

「いいえ、もう只今お長をやりましたから大騒ぎをして帰って入らいつしやいますわ。」

「先刻さつき私は誰もいないのだと思って、一人でずんずんここへ上って来たんです。」と言って、お長が手枕の真似をしたことを胸に浮べる。女の人はい少し頭痛がしたの

で奥で寝やすんでいたところ、お長が裏口へ廻まわって、障子を叩いて起してくれたのだと言う。

「もう何ともございません。」と伏し目になる。起きて着物をちやんとして出て来たものらしい。稍ややあって、

「あなたはこの節は少しはおよろしい方でございますか。」と聞く。自分の事は何でもすっかり知っているような口振りである。

「どうも矢っ張り頭がはきはきしません。実は一年休学する事にしたんです。」

「そうでございませうね。小母さんは毎日あなたの事

ばかり案じて入らっしやるんですよ。今度またこちらへお出でになる事になりましたから、どんなにお喜びでしたか知れません。……考えると不思議な御縁ですわね。」

「妙なものですね。この夏はどうした事からでしたか、ふとこちらへ避暑に来る気になったんですが、——私は余り人のざわつくところは厭だもんですから。——その代り宿屋なんぞの無いという事ははじめから承知の上なんでしたけれど、さあ、船から上ってそこらの家へ頼うちんで見ると、果してみんな断ってしまうでしょう。困ったんですよ。」

婦人は微笑む。

「それで仕方がないもんだから、とうとのこのこ役場へやっで行ったんでした。くるくる坊主ですなこのこの村長は。」

「ええ、ほほほ。」

「そしたらあの方が親切に心配してくれたんです。」

「そしてこのこの小母さんに、私は母というものがないんだから、こんな家へ置いてもらったらいいのですがって、そう仰ったのですってね。」

「そうでしたかなあ。とにかく小母さんを一と目見ると

から、何かしら懐しくなっただんです。」

「そんなに仰ったものですから、小母さんもしおらしい方だと思って、お世話をする気になったんですって。」

「私は今では小母さんが生みの親のように思われるんですよ。私の家にいたって何だか旅の下宿にでもいるような気がするんですもの。」

「小母さんも青木さんはあたしの内証の子なんだかも知れないなんて冗談を仰るんですよ。」

「あ、いつか小母さんが指へ傷をしたというのはもう直ったのですか。」

「ええ只ナイフで一寸切ったばかりなんですから。」  
二人はこのような話をしながら待っている。築地ついでじの根  
を馬の鈴が下りてゆく。馬を引く女が唄を歌う。

障子を開けて見ると、麓の蜜柑畑みかんばたけが更紗さらさの模様ようのよ  
うである。白手拭を被った女たちがちらちらとその中を  
動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹続いて出る。やはり女が  
引いている。向いの、縞のようになった山畠に烟が一筋  
揚っている。焰がぼろぼろと光る。烟は斜に広がって、  
末は夕方の色と溶けてゆく。

女の人も自分の側へ寄って等しく外を見る。山畠のあ

ちらこちらを馬が下りる。馬は犬よりも小さい。首を出して見ると、庭の松の木のはずれから、海が黒く湛たえている。影の如き漁船りようせんが後先になつて続々帰る。近い干潟ほのじろの灰白い砂の上に、黒豆を零こぼしたようなのは、鳥の群が下りているのであろうか。女の人の教える方を見れば、青松葉をしたたか背負つた頬冠りの男が、とことこと畦あぜ道みちを通る。間もなくこちらを背にして、道に附いて斜かたまりに折れると思うと、その男は最早、只大きな松葉の塊かたまりへももひき股引の足が二本下つたばかりのものとなつて動いている。松葉の色が見る見る黒くなる。それが蜜柑畑の向う



へ這入はいってしまふと、しばらく近くには行くものの影が絶える。谷間谷間の黒みから、だんだんとこちらへ迫つて来る黄昏の色を、急がしい機はたの音が招き寄せる。

「小母さんは何でこんなに遅いのでしようね。」と女の人は慰めるようにいう。あたりは見るうちに薄暗くなる。女の人が一寸出て行つて、今度帰つて坐つた時には、向き合いになつても最もう面輪おもわが定かに見えない。

女の方は、立たつて押入から竹洋燈たけランプを取り出して、油を振たつて見て、袂たもとから紙を出して心しんを摘む。下へ置いた笠に何か書いた紙切れが喰くつ附ついている。読んで見ると

章坊の手らしい幼い片仮名で、フジサンガマタナクと書いてある。

「あら。」と女の人は恥かしそうに笑ってその紙を剥がす。

「章ちゃんがこんな悪戯いたずらをするんですわ。嘘ですよ、みんな。」と打消すようにいう。

「何の事なんです、これは。」

「ほほほ。」

「フジサンというのは。」

「あたしでございます。」

「ああ、お藤さんと仰るんですか。」

「はい。」と藤さんは微笑みながら、立って押入れを探  
す。

藤さんという名はこうして知ったのである。

「そしてあなたが何でお泣きになったんです？」

「いいえ、嘘ですの、そんな事は。」

「<sup>マツチ</sup>燐寸を探して入らっしゃるんですか。私が持っています。」

「あら、冗談なのでございますわ。あれは章ちゃんが  
……。」と勘違えをしている。ポケットから燐寸を出し

て洋燈を点すと、

「まあ、恐れ入ります。」と藤さんは坐る。燈火ともしびに見れば、油絵のような艶あでやかな人である。顔を少し赤らめて  
いる。

「あしが一番あん。」と章坊が着物を引つ抱えて飛び出すと、入れ違いに小母さんが這入って来て、シャツの上から着物を着せかけてくれる。

「さ、これをあげましょう。」と下締したじめを解く。それを結んで小暗い風呂場から出て来ると、藤さんが赤い裏の羽

織を披ひろげて後へ廻る。

「そんなものを私に着せるのですか。」

「でも他にはないんですもの。」と肩へかける。

「それでも洋服とは楽でがんしようがの。」と、初やが焜こんろを煽あおぎながらいう。羽織は黄八丈である。藤さんのだということは何わかわらずとも別わかっている。

「着物が少し長いや。ほら、踵かかとがすっかり隠れる。」  
と言うと、

「母さんのだもの。」と炬燵こたつから章坊が言う。

「小母さんはこんなに背が高いのかなあ。」

「なんの、あなたが少し低うなりなんしたのいの。病気をしなんすもんじゃけに。」と初やが冗談をいう。

「女は腰のところを下帯で紮からげて着るんですから。」と言つて、藤さんは側から羽織の襟を直してくれる。

「何故そうするんでしょう。」

「みんなそうするんですわ。おや、羽織に紐ひもがございませんわね。」

「いいえ結構。」というと、初やが、

「まあ、お二人で仲のいいこと。」と言いさま、急にはたばたとはげしく煽ぎ出す。

「まあ。」と藤さんは赤い顔をしている。

蜜柑箱を墨で塗って、底へ丸い穴を開けたのへ、筒抜けの罐詰かんづめの殻を嵌はめて、それを踏台の上に乗せて、上から風呂敷をかけると、それが章坊の写真機である。

「またみんなを玩具おもちゃにするのかい。」と小母さんが笑う。この細工は床屋の寅吉に泣き附いてさせたのだという。章坊は、

「兄さんを写してあげるんだから、よう、炬燵こたつから出てくださいよ。」と甘えるように言うかと思うと、

「じきです。直き写ります。」と、まじめに写真やのつもりでいる。

「兄さんは炬燵へ当ってる方が甘くうま写るよ。」

「だって姉さんが邪魔をしてるんだもの。」と風呂敷の中へ頭を入れる。

「姉さんぐずぐずしてると背中が写って終しまいますよ。」

「はいはい。」と、藤さんは笑いながら自分の隣へ移る。

「兄さん、もつと真っ直ぐ。」

「私の顔が見えるの？」

「見えるとも、そら笑ってらあ。やあい。」



がたがたと箱を揺ぶる。やがて勿体もったいらしく身構えをして、

「はい、写しますよ。」とこちらを見詰める。

「あら、目を閉つぶってるものがあるものか。……さ、写りますよ。……ただ今。はいありがとう。」と手に持った厚紙の蓋ふたを罐詰かぶへ被せると、箱の中から板切れを出して、それを提さげて、得意になって押入の前へ行く。

「章ちゃん、もう夜はそんな押入なぞへ這入るもんじやないよ。」と小母さんが止めると、

「だってお母さん。写真を薬でよくするんじやありません

んか。」と泣きそような顔をする。

「それよりか写真屋さん。一昨日おとといかしら写したあたしの写真はいつ出来るんですか。」と藤さんが問う。小母さんも、「私ももう五六度写った筈だがねえ。いつ出来るんだらう。まだ一枚もくれないのね。」と突っ込む。それから小母さんは、向いの地方じがたへ渡って章坊と写真を撮とった話をする。章坊は、

「今度は電話だ」と言つて、二つの板紙ボールがみの筒を持って出て来る。筒の底には紙が張つてあつて、長い青糸が真ん中を繫つないでいる。勸工場かんこうばで買ったのださうである。章

坊は片方の筒を自分に持たせて、しばらく何かしら言うて、

「ね、解わかったでしょう？」という。

「ああ、解わかったよ。」といい加減に間まを合あわしておくと、

「万歳。」と言いってにこにこして飛とんで来て、藤ふじさんを除ぞけて自分の隣となりへあたる。

「よ。姉あねさんもだよ。」という。

「よしよし。」

「何なにの事ことなんです。」と藤ふじさんは微笑ほほえむ。

「今電話いまでんわがかかりましてね、……」

「ああ今言つちやいけないんだよ兄さん。あれは姉さんには言われないんだから。」

「何でしょう。人が悪いのね。」

このような事を言っているところへ、初やがきつねまんじゅう狐饅頭を買って帰って来る。小提灯を消すと、ろうそく蠟燭から白い煙がふわふわと揚る。

「奥さま、今度の狐もやっぱり似とりますわいの。」と言つてげらげらと初やが笑う。

饅頭を食べながら話を聞くと、この饅頭屋の店先には、娘に化けて手拭を被った張子の狐が立たせてあつた。そ

の狐の顔がその家の若い女房に可笑しい程そっくりなので、この近在で評判になった。女房の方では少しもそんなことは知らないでいたが、先達せんだつてある馬方が、饅頭の借りを払ったとか払わないとかでその女房に口論を仕かけて、

「ええ、この狐め。」

「何でわしが狐かい。」

「狐じやい。知らんのか。鏡を出してこの招牌かんぼんと較べて見い。間抜けめ。」

こう言ったようなことから、後で女房が亭主に話すと、

亭主はこの辺では珍らしい捌さばけた男なんだそうで、それは今頃始った話じゃないんだ。己の家の饅頭がなぜこんなに名高いのだと思う、などと茶らかすので、そんならお前さんはもう早くから人の悪口わるくちも聞いていたのかと問えば、うん、と言って澄ましている。女房はわっと泣き出して、それを今日まで平気でいたお前が恨めしい。畢竟きようわしを馬鹿ばかにしているからだ。もうこれぎり実家さとへ帰って死んでしまおうと言って、箆たんす筒から着物などを引っぱり出す。やがて二人で大立廻りをやって、女房は髪を乱して向いの船頭の家へ逃げ込むやら、とうとう面倒な事

になつたが、とにかく船頭が仲裁して、お前たちも、元を尋ねると踊りの晩に袖を引き合いからの夫妻めおとじやないか。さあ、仲直りに二人で踊れよおい、と五合ばかり取つて来た。その時の女房との条約に基づいて、店の狐は翌日から姿を隠して了つた。ほかの狐が箱に這入つて城下の人形屋から来て、再び店に立ったのはついこの間の事である。今度のは大きさもいたち鼬位しかないし、顔も少し趣を変えるように注文したのであろうけれど、

「なんぼどのような狐をこしら拵えて来たところで、お孝ちやんの顔が元のままじゃどうしても駄目でがんすわい

の。へへへへへ。」と、初やは、やっと廻りくどい話を切つてあちらへ立つ。藤さんはもう先達も聞いたから、今夜はそんなに可笑しくはないと言つたけれど、それでも矢張りはじめてのように笑っていた。

話が途絶える。藤さんは章坊が蒲団へ落した餡あんを手の平へ拾う。影法師が壁に写っている。頭が動く。やがてそれがきちんと横向きに落ち附くと、自分は目口眉毛を心で附ける。小母さんの臂うでがちよいちよい写る。簪かんざしで髪の中を搔かいているのである。

裏では初やが米を搗つく。



自分は小母さんたちと床を列べて座敷へ寝る。

枕が大きくて柔かいから嬉しいと言うと、この夏には浮<sup>う</sup>っかりしていたが、あんな枕では頭に悪いからと小母さんがいう。藤さんはこの枕を急いで拵<sup>あだ</sup>えてから、仇に十日あまりを待ち暮したと話す。

藤さんは小母さんの蒲団の裾を叩いて、それから自分のを叩く。肩のところへ坐って夜着の袖をも押えてくれる。自分は何だか胸苦しいような気がする。やがてあちらで藤さんが帯を解く<sup>けはい</sup>気色がする。章坊は早く小さな<sup>いびき</sup>鼾

になる。自分は何とはなしに寝入って了<sup>しま</sup>うのが惜しい。

「ね、小母さん。」と再び話しかける。

「え？」と、小母さんは閉じていた目を開ける。

「あの、一たい藤さんはどうした人なんです？」と聞く  
と、

「なぜ？」と言う。

聞いて見ると、この家が江田島の官舎うちにいた時に、藤さんの家と隣り合せだったのだそうである。まだ章坊も貰わない、ずっと先の事であったし、小母さんは大變に藤さんを可愛がって、後には夜も家へ帰すよりか自分の

側へ泊らせる方が多いくらいにしていた。はじめそこへ移<sup>が</sup>つて来た翌<sup>ぎ</sup>の日であつたか、藤さんがふと境の扇骨木<sup>かなめ</sup>垣<sup>がき</sup>の上から顔を出して、

「小母さま。今日は。」と物を言いかけたのが元であつた。藤さんが七つ八つに過ぎぬ頃であつたろう。それから四五年してここの主人が亡くなって、小母さんはこちらへ住居をきめる事になった。別れの時には藤さんも小母さんも泣いた。藤さんはその後いつまでも小母さん小母さんと恋しがって、今日まで月に一二度、手紙を欠かした事はない。藤さんの家は今佐世保にあるのだそうで、

お父さんは大佐だそうである。

「それでは佐世保から遙々はるばる来たんですか。」

「いいえ、あの娘こだけは二た月ばかり前から、この対岸むかいにいるんです。あなたでも同じおんなですけど、こんなに  
なると、情合じようあいは全く本当の親子と変りませんわ。」

「それだのにこの夏には、あの人の話は一寸も出ま  
せんでしたね。」

「そうでしたかね。おや、そうだったかしら。」

「そして私の事はもうすっかりあの人に話してあるよう  
ですね。」

「ふふふそれはあなた、家うちでは何とかいとうと直ぐあなたの話が出るんですから、あの人だって、まだ見もしない内からもう青木さん青木さんと言って、お出でになってもまるで兄きょうだい妹かなぞのように思っているんですものと章坊の枕を直してやる。」

「さつきもね、初やから、お嬢さんは存外人に恥かしがらない方だとかなんとか言っただけだからかわれたんでしよう。そうするとね、だってあの方はもうよくお知り申してる方なんだものってそう言うんですよ。それでいてまだずいぶん子供のようなところがあるんですからね。」

「私だって何だか、はじめて会った人のようには思えませんが。——まだ永く逗留するんですか。」

「あの娘こですか。そうですね……一体今度こちらへまいったというのが……」

仕舞しまいを欠あぐびと一緒に言つて、枕へ手を添えたを見ると、小母さんはその後を言わないで、それなりふいと眉毛のあたりまで埋まり込んでしまふ。しばらく待つて見ても容易に再び顔を出さない。蒲団さらさの更紗ありあけあんどんへ有明行燈あかりの灯あかりが朧おぼろにさして赤い花の模様がどんよりとしている。

何だか煮え切らない。藤さんが今度来たのはどうした

のだというのか。何か面白くない事情があるのでしょうか。小母さんは何とか言いかけてひよつくり黙ってしまった。藤さんはどうして九月から家を出ているのか。この対岸むかいのどんな人のところにいるのであるろう。

池へ山水の落ちるのが幽かすかに聞える。小母さんはいつしか顔を出してすやすやと眠っている。大根を引くので疲れたのかも知れない。小母さんの静かな寝顔をじっと見ていると、自分もだんだんに瞼まぶたが重くなる。

千鳥の話は一と夜明けける。

自分は中二階で長い手紙を書いている。藤さんが、「兄さん。」と言って這入って来る。

「あの只今船頭が行李を持ってまいりましたよ。」という。

「あれは私のです。」と言ったまま、やっぱりずんずんと書いて行く。

「それはそうですけれど、どうせこちらへ運ばなければならぬのでしょう?」

「ええ。」

「ではこの押入には、下の方はあたしのものが少しばかり



り這入っておりますから、あなたは当分上の段だけで我慢してくださいましな。」

「……………」

「ねえ。」

「ええ。」

「まあ一心になっていらっしやるんだわ。」という。

丁度一と区切り附いたから向き直る。藤さんは少し離れて膝を突いている。

「お召し物も来たんでしよう？——では早くお着換えなさいましな。女の着物なんか召して可笑しいわ。」と微笑ほほえ

む。自分は笑って、袖を翳<sup>かざ</sup>して見る。

「先刻<sup>さつき</sup>ね。」と、藤さんは袂<sup>たもと</sup>へ手を入れて火鉢の方へ来る。

「これご覧なさい。」と、袂<sup>たもと</sup>の紅絹裏<sup>もみうら</sup>の間から取り出したのは、茎の長い一輪の白い花である。

「この頃こんな花が。」

「蒲公英<sup>たんぽぽ</sup>ですか。」と手に取る。

「どこで目つけたんです？ たった一本咲いてたんですか。」

「どうですか。さつき玉子を持って来た女の子がくれて

ったんですの。どこかの石垣に咲いていたんだそうです。初やがね、これはこの頃あんまり暖かいものだから、つい欺だまされて出て来たんですって。」

返した花を藤さんは指先でくるくる廻している。

「本当にもう春のようですね、こちらの気候は。」

「暖いところですね。」

自分はもくもくと日のさした障子を見つめて、陽炎かげろうのような心持になる。

「私只今お邪魔じゃございませんか。」

「何がですか？」

「お手紙はお急ぎじゃないのですか。」

「そうですね。——郵便の船は午ひるに出るんでしたね。」

「ええ。ではあとですぐ行李をこちらへ運ばせますから。」と、藤さんは張合が無さそうに立って行く。

「あ、この花は？」

「え？」と出口で振り向いて、

「それはあなたにおあげ申したのですわ。」

藤さんが行ってしまったあとは何やら物足りないようである。たんぽぽを机の上に置く。手紙はもう書きたくない。藤さんがもう一度やって来ないかと思う。ちぎっ

た書き崩しを拾って、くちやくちやに揉んだのを披げて、皺を延ばして畳んで、また披げて、今度は片端から噛み切っては口の中で丸める。いつしか色々の夢を見はじめる。——自分は覚めていて夢を見る。夢と自分で名づけている。

馬の鈴が聞えてくる。女が謡うのが聞える。

不凶立って廊下へ出る。藤さんが池の側に踞んでいて、

「もうおすみになつて？」と声をかける。自分は半煮えのような返事をする。母屋の縁先で何匹かのカナリヤが

焦氣やつぎに嘔さえぎり合っている。庭一杯の黄色い日向ひなたは彼等が吐き出しているのかと思われる。

「一寸入らっしてご覧なさいな。小さな鮒ふなかしら沢山いますわ。」と、藤さんは眩まぶしそうにこちらを見る。

「だって下駄がないじゃありませんか。」

「あたしだって足袋の儘またですわ。」

自分もそれなり降りて花床を跨またぐ。はかなげに咲き残った、何とかいう花に裾が触れて、花卉はなびらの白いのがはらはらと散る。庭は一面に裏枯れた芝生である。離れの中二階の横に松が一叢ひとむら生えている。女松の大きいのが二本

ある。その中に小さな水の溜りがある。すべてこの宅地を開く時に自然の儘を残したのである。

藤さんは、水の側の、苔の被った石の上に踞んでいる。水際にちらほらと三葉四葉附いた櫛はぜの実生えが、真赤な色に染っている。自分が近づけば、水の面が小砂を投げたように痺しびれを打つ。

「おや、みんな沈みました」と藤さんがいう。自分は、水を隔てて斜に向き合って芝生に踞む。手を延ばすなら、藤さんの膝に辛うじて届くのである。水は薄黒く濁っていれど、藤さんの翳す袂の色を宿している。自分の姿は

黒く写って、松の幹の影に切られる。

「また浮きますよ。」と藤さんがいう。指すところをゆびさじつと見守っていると、底の水苔を味噌汁のようにおだ煽て、幽かな色の、小さな鮎子がむらむらと浮き上る。上へ出て来るにつれて、幻から現うつつへ覚めるように、順々に小黒い色になる。しばらく一しよに集ってじつとしている。やがて片端から二三匹ずつ繰り出して、列を作つて、小早に日の当る方へと泳いで行く。ちらちらと腹を返すのがある。水の底には、泥を被かぶった水草の葉が、泥へ彫刻したようになっていいる。稍ややあつて、ふと、鮎子の



一隊が水の色と紛れたまぎと思うと、底の方を大きな黒いのがうじゃうじゃと通る。

「大きなものもいるんですね。そ、あそこに。」と指すと、  
「どこに。」と藤さんが聞く。併しそれは写っている影であった。鮎子は矢っぱり小さく上の方を行く。自分は足元の松葉を掻き寄せて投げ附ける。鮎子は響の如くに沈んで、争い乱れて味噌汁へ逃げこんで了う。

藤さんが笑う。

手飼の白鳩が五六羽、離れの屋根のあたりから羽音を立てて芝生へ下りる。

「あの鷗かもめは綺麗な鳥ですね。」と藤さんがいう。

「あれは鳩じゃありませんか。」

「ほほほほ、あれじゃないんですの。あたしね、ほほほほ。」

「どうしたんです？」

「いいえ、あたし飛んでもない事を思い出したんですわ。」と一人で微笑む。

「何を？」

「何でもないことです。——先達せんだつてあたしがこちらへ渡とまつて来る途中でね、鷗が一匹、小さな枝切れへ棲とまって、

波の上をふわりふわりしていたんですの。丁度学校なぞにある標本を流したようでしたわ」

自分は気が附いたように、海の方を見渡す。遙かの果てに地方じがたの山が薄うっすら見える。小島の蔭に鳥貝を取る船がひ一と群帆むれを聯つらねている。

「ね、鳩が餌を拾うでしょう。」と藤さんがいう。

「芝生に何か落ちてるんでしょうか。」

「あたしがさつき撒まいて置いたんです。いつでもあそこへ餌を撒くんです。」

「あ、あれは足をどうかしてるようですね。」

初やがすたすたとやって来る。紺の絆天はんでんの上に前垂をしめて、丸く脹ふくれている。

「お嬢さん。」

「何？」

「いいや、男のお嬢さんじゃわいの。」

「まあ。今お着換えなさるんだわ。」

「私がどうした。」

「冗談は置いて、あなたは蟹を食べなんしたか。」

「いつ？」

「ほほほ、鷗のような話ね。——蟹を召しあがれば買っ

て来る積りなの？」

「ええ、はあ買うたるのよの。午ひるに煮ようかと思うんでがんさ。はあ直じきにお午じやけに。——食べなんした事ががんすのかいの。」

「食べるけど、あれは厄介なばかりで仕方がないや。」

「おいしいものですけれどね。」

「それは甘うもうがんとすえの。それにこの頃は月が無い頃じやけに尚更甘いんでがんすわいの。いいえ、ほんとでがんとすて。月夜にはの、あれが自分の影に怖れてびくびくするけに瘦やせるんでがんすといの。」

村の水天宮様の御威徳を説く時の顔附である。

「ほほほ。」

「おもしろいな、それは。」

「そんなら食べなんすか。」

「食べるよ。」

「じゃ、よかった。」と、またあちらへすたすたと、草履の踵かかとへ短い影法師を引いて行く。

鳩は少しも人に怖れぬ。

自分は外へ出て見たくなる。藤さんは一人で座敷で縫

物をしている。一しよに浜の方へでも出て見ぬかと誘うと、

「そうですね。」と、にっこりしたが、何だか躊躇ちゆうちよの色が見える。二人で行ったとて誰が咎とがめるものかと思う。

「だってあんまりですから。」と、稍ややあつて言う。

「何が。」

「でもたった今これを始めただばかりですから。」

「ついでに仕上げて了いたいのですか。」

「いいえ、そうじゃないのですけど、何だか小母さんに済まないから。——あたし行きたいんですけれど。」

「では行けばいいじゃないですか。」

「そんな事は構わないんですけどね、あたしこちらへま  
いってから、いつも鬱ふさいでばかりいて、何一つ碌ろくにお手  
伝いした事もないんでしよう。」

自分は立膝をして、物尺ものさしを持って針山の針をこつこつ  
叩いて、順々に少しずつ引っ込ませていたが、ふと叩き  
過ぎて、一本の針を頭も見えないようにして了う。幸に  
それには一寸した糸が附いていたので、ぐいとその糸を  
引くと、針はすらりと抜ける。

「もう一と月からになるのですのに、ずっと私そんなで



したものですから、今日は気分はいいし、私の方からそう言つて、これを言い附かつたのですのに。」

「構わないや、そんなことは。」

「だって女はそうも……」と、針に糸を通す。

自分は素直に立つて、独りで玄関へ下りたが、何だか張合が抜けたようで暫くぼんやりと敷居に立つて居る。

と、

「兄さん。」と藤さんが出て来る。

「あそこに水天宮さまが見えてるでしょう。あそこの浜辺に綺麗な貝殻が沢山ありますから、拾つていらつしや

いな。」という。そんなに勢はずまないのだけれど、もうよ  
そうとも言えないので、干し列べた平莖の中をぶらぶら  
と出て行く。

五六歩すると藤さんがまた呼びかける。

「あなたお背せなに綿屑くか知ら喰くっ附くいていますよ。」

「どこに？」

「もっと下。」

「この辺ですか。」

「いいえ。」

「大きいのですか。」

「あ、もう一寸上」と言い言い出て来て取ってくれる。

真綿の切れに赤い絹糸の絡からんだのが喰つ附いていたのである。藤さんはそれを手で揉みながら、

「いいお天気ですね。」という。一緒に行つて見たいという念が素振そぶりに表われている。門を出しなに振り返ると、藤さんはまだうろうろと立っている。

「お早くお帰りなさいました。」

「ええ。」と自分は後の事は何んにも知らずに、ステッキを振り廻しながらとことこと出て行つたけれど、二人は遂にこれが永き別れとなつたのである。

勿論この時には、借りた着物はもう着換えていた。着換えるまで自分は何の気もなしにいたけれど、こうして島の宿りに客となつて、女の人の着物を借りて着たのかと思つと、脱ぐ段になつて一種の艶えんな感じが起つた。何だかもう少し着ていたいようにも思われた。そして、しばらく羽織の赤い裏の裏返つたのを見守つた。自分の家なぞでは、こんな花やかな着物を脱ぎ捨ててあることは遂に見られない。姉は十一で死んだ。その後家いえ中じゆうに赤い切れなぞは切れつ端もあつたことはない。自分の家は冬枯れの野のようだとつくづくそう思う。その内に不図

蛇の脱殻ぬけがらが念頭に浮んだ。蛇は自分の皮を脱いで、脱いだ皮を何と見るであろうかと、飛んでもない事を考え出した時、初やがやって来て、着換えた着物を持って行った。

今自分は、その蛇が皿を卷いたような丘の小道をぐるぐると下りて行く。一曲りずつ下りるにつれて、女の歌っているのが追々おいおいに鮮あざやかに聞き取れる。

「ねんねしなされ、おやすみなされ。鶏とりがないたら起きなされ。」と歌う。艶つややかな声である。

「おきて往いなんせ、東が白む。館やかたやかた々の鶏なが啼なく。」と

丘を下りて了うと、歌うのは角の豆腐屋のお仙である。すべてこの島の女はよく唄を歌う。機はたを織るにも畠を打つにも、舟を漕ぐにも馬を曳くにも、働く時にはいつも歌う。朝から晩まで歌っている。行くところに歌の揚らぬ事があれば、そこには若い女がないのである。若い女はみんな歌う。そしてお仙などは一番うま甘い組のようである。

お仙は外に背中を向けて豆を挽ひいている。野袴をつけた若者が二人、畠の道具を門口へ転がしたまま、黒燻くろくすぶりの竈かまどの前に踞しゃがんで煙草を喫のんでいる。破れた唐紙の

陰には、大黒頭巾を着た爺さんが、火鉢を抱え込んで、人形のように坐っている。真っ白い長い顎髯あごひげは、豆腐屋の爺さんには洒落しやれ過ぎたものである。

「おかしakashakash櫛の葉は白い。今の娘の齒は白い。」  
お仙は若い者がいるので得意になって歌っている。家に附いて曲ると、

「青木さんよう。」と、呼び止める。人並より余程広い額に頭痛膏をべたべたと貼り塞ふさいでいる。昨夕ゆうべの干潟の鳥のようである。

「昨日きんによう来なんしたげなの。わしや丁度馬を換えに行つ

とりましての。」と、手を休めて、

「乗りなんせい。今度のも大人しゅうがんすわいの。」  
と言ったかと思うと、また直ぐに歌になる。

「親が二十はたちで子が二十一。どこで算用さんによが違ちがたやら。」

「よい、よい。」と野袴のぼこの一人が囃はやす。

横の馬小屋を覗のぞいて見たが、中に馬はいなかった。馬小屋のはずれから、道の片側いちじゆくを無花果いちじゆくの木が長く続いて居る。自分はその影を踏んで行く。両方は一段低くなつた麦畠である。お仙の歌は追々に聞えなくなる。ふと藤さんの事が胸に浮んで来る。藤さんはもう一と月も逗留



しているのだと言った。そして毎日鬱ふさいでばかりいたと言った。何か訳があるのである。昨夜ゆうべ小母さんが俄にわかに黙ってしまったのは、眠いからばかりではなかったらしい。どういう事なのであろうかと頻しきりに考えて見る。後うしろから鈴の音が来る。自分はわが考えの中で鳴るのかと思う。前から藁わらを背負った男が来る。後で、「ごめんなんせ。」という。振り向くと、馬の鼻が肩のところを覗いている。小走りに百姓家の軒下へ避よける。そこには土間で機を織っている。小声で歌を謡っている。「おおい。」と言って馬を曳いた男が立ちどまる。藁の

男は足早に同じ軒下へ避ける。馬は通り抜ける。蜜柑みかんを積んでいる。

と、

「まあ誰ぞいの。」と機を織っていた女が甲走かんばしった声を立てる。藁の男が入口に立ち塞ふさがって、自分を見て笑いながら、じりじりとあとしざりをして、背中の藁を中へ押し込めているのである。

「暗いわいの。」と女がいうと、

「ふふふ。」と男は笑っている。打とけた仲かも知れない。

再び藤さんの事を考えつつ行く。初やは事情を知っているかも知れぬ。あれしやべに喋らせて見ようか知らと思う。

このあたりはすべて漁師の住居である。赤ん坊を竹籠へ入れて、軒へぶらぶら釣り下げて、時々手を挙げて突きながら、網の破れをかがっている女房がある。縁先のむしろ蓆むしろに広げた切芋へ、蠅が真たかつ黒まるに集たかつて、全まるで蠅を干したようになっているのがある。だけれど、初やに聞きくというのは、何だか、小母さんが言わないでいる事を陰へ廻まって探たるようなで変である。聞きくまい。知しれる時ときには知しれるのだ。自分自分はなぜここんなに藤藤さんの事ことを気きにする

のであろう。単に好奇心というに過ぎないのであろうか。

この時自分は、浜の堤の両側に背丈よりも高い枯薄かれすすぎが透間すきまもなく生え続いた中を行く。浪がひたひたと石崖に当る。程経て横手からお長が白馬を曳いて上って来た。何やら丸い物を運ぶのだと手真似で言つて、一しよに行かぬかと言うのである。自分は附いて行く気になる。馬の腹がざわざわと薄の葉を撫でる。

そこを出ると水天宮の社である。あとで考えると、この辺で引き返しさえしたらよかつたのに、自分はいつまでも馬の臀しりに附いて、山畠を五つも六つも越えて、とう

とお長の行くところまで行ったのであった。谷合いの畠にお長の双た親おやと兄の常吉がいた。二三寸延びた麦の間の馬鈴薯を掘っていたのである。

「まあ、よう来てくれなんしたいの。」と言ってみんなで喜ぶ。爺さんは顔中を皺しわにして、

「わし等はあるが往いんなんしたあと、いつまでもあったの事ばかり話していたんぞ。」とにこにこする。

「はあ死ぬまで会われんのかいと思うたに。」と母親が言う。自分は小さい時の乳母にでも会ったような心持がする。しばらく色々な話をする。

やがて双た親は掘りはじめる。枯れ萎れた茎の根へ、  
 ぐいと一と鍬すき入れて引き起すと、その中にちらりと猿の  
 臀しりのような色が覗く。茎を搦つかんで引き抜くと、下に芋が  
 赤く重なって附いて居る。常吉はうしろからほきほきと  
 それをもぎ取って畚ふこへ入れる。一と畚溜ればうんと引つ  
 抱えて、畦くろに放した馬の両腹の、網の袋へうつし込む。  
 馬は畠へ影を投げて笹の葉を喰っている。自分はお長と  
 並んで、畠の隅の蓆むしろの上で煙草たばこを吹かす。双た親は鍬  
 を休める度毎には自分の方を向いて話しをする。お長も  
 時々袖を引いて手真似で話す。沖の鳥貝を搔く船を指ゆびさ

して、どの船も帆を三つずつ横向きにかけている。両端から二本の碇綱いかりづなを延しているゆえ、帆に風を孕はらんでも船は動かない。帆が張っているから碇綱は弛ゆるまぬ。鳥貝は日に干して俵に詰めるのだなどと言う。浪が畠の下に崖に砕ける。日向ひなたがもくもくと頭の髪に浸みる。

やがて常吉の若い嫁が、赤い馬を引いてやって来る。その馬が豆腐屋のであった。嫁も掘る。自分も掘って見たいと言ったけれど、着物がよごれるから駄目だと言って母親が聞かない。嫁は唄を謡う。母親も小声で謡う。謡えぬお長は俯うつつ伏ぶして蓆の端を搔むしっている。

常吉が手を叩くと、お長は立って、白馬を引いて行く。

網の袋には馬鈴薯が一ぱいになっている。白馬が帰って来ると、嫁の赤馬が出て行く。赤が帰ると白が出る。

「父<sup>とう</sup>やん、はあ止<sup>や</sup>めにしなんせ。」と常吉が鉢巻を取った時には、もう馬の影も地に写らなかつた。自分は何時間居ったか知らぬ。鳥貝の白帆も疾<sup>と</sup>くにいなくなっている。

「旦那は先い往<sup>い</sup>んなんせ。お初やんが尋ねに出ましように。」と母親がいう。自分は初めて貝殻の事を思い出して、そこそこに水天宮のところまで帰って来る。



夕日が遙か向いの島蔭に沈みかかっている。貝殻はもう止そうかしらと思つたが、何だか気が済まぬゆえ、せめて三つ四つばかりでもと思つて干潟へ下りる。嫁の皿という貝殻が沢山ころがつている。拾い出すと中々止められない。とうと片っ方の袂へ大方一っぱいになるまで拾う。

上へ上つて見ると、自分の歩いた下駄の跡が、居坐つた二つの漁船りようせんの間にうねすねと二筋に続いている。歸つたら藤さんが一番に出て来て、まあ何をしておいでになつたんですと言うであろう。そして貝殻を玄関へうつ

し出すと、おや沢山にまあと言つて嬉しそうにするであらう。自分はそれをもう有つた事のように考え浮べながら、袂を抱えて小早に帰る。豆腐屋の前まで来ると、お仙が門口でカンテラへ油をさしていた。

丘を上る途中で、今朝買寄せたばかりの下駄なのに、ぷすり前鼻緒が切れる。元が安物で脆弱ひよわいからであろうけれど、初やなぞに言わせると、何か厭な事がある前徴である。仕方がないから、片足袋ぬいで、半分跣足はだしになる。

家へ帰ると、戸口から藤さん呼びかけて、しばらく玄関にうろついていたが、何の返事もない。もう一度高

く呼んで、今度は小母さんと言って見たがやっぱり返事がない。家中がしんとしていて、自分の声の這入って行く跡が見えるようである。勝手へ廻って初やを呼んでも初やもいない。変だと思いつながら、有り合せの下駄を提さげて井戸端へ出て、足を洗おうとしていると、誰か知ら障子の内でしくしくと啜すすり泣きをしている。障子を開けて見ると章坊である。足を投げ出して悄しよんぼりしている。「どうしたんだ。」と問えど、返事もしないでただ涙を払う。

「お母さんはいないの？」と言えは顔を横に振る。

「いるの？」と言えどやっぱり横に振る。

「どうしたんだ。姉さんはどこへ行ったんだい？」と聞くと、章坊は涙の目を見張って、

「姉さんはもう帰っちゃったんだもの。」と泣き出すのである。

「おや、いつ？」

「よその伯父さんが連れに来たんだ。」

「どんな伯父さんが。」

「よその伯父さんだよ。」と涙を啜る。

自分は深い谷底へ一人取残されたような心持がする。

藤さんは俄かに荷物を纏めて帰って行ったというのである。その伯父さんというのは大分年の入いった、鼻の先に痘痕あばたがちよぼちよぼある人だという。小母さんも初やも一しよに隣村の埠頭場はとばまで附いて行ったのだそうである。夕方の船はこの村からは出ないのである。初やは大きな風呂敷包みを背負って行った。も少し先のことだという。その伯父さんは章坊が学校から帰ったらもう来ていたというのである。自分は藤さんの身の事情が、色々に廻まわり燈籠とうろうの影のように想像の中を廻る。今埠頭場まで駈けつけたら、船はまだ出ない内かも知れない。隣村の

真ん中までは二十町ぐらいいはあろうけれど、どこかの百姓馬を飛ばせば訳はない。何だか会って一と言別れがしたいようである。この儘では物足りない。欺だまされでもしたようにあつけない。駈け附けて見ようか知らと思うけれど、考えると、その伴れに來た人間に顔を見られるのが厭である。何だか無性に人相のよくない人間のような気がしてならない。それが怪しげな眼附きをしてじろじろと白眼にらみでもすると厭である。又船が出た後であつては間抜けている。そして小母さんに自分などは來なくてもいいのと思われると何だかきまりが悪い。こう思つ

て決心がつかない。しばらく茫ぼんやりと立って、その伯父さんの顔を考えて見る。これまで見た事のある厭な意地くねの悪い顔を色々取り出して、白髪かつらの鬢かつらの下へ嵌はめて、鼻へ痘痕を振って見る。

やがて自分はこのこと物置の方へ行つて、そこから稲妻の形に山へ付いた切道を、すたすたと片跣かたはだし足のままで駈け上る。高みに立てば沖がずっと見えるのである。そして、隣村の埠頭場から出る帆あががあれば、それが藤さんの船だと思つたからである。上あがれるだけ一足でも高く、境めぐに繞らす竹垣の根まで、雑木の中を無理矢理に上つて、

小松の幹を捉えて息を吐く。

白帆が見える。池の如くに澄み切った黄昏たそがれの海に、白帆が一つ、動くともなく浮いている。藤さんの船に違いない。帆のない船はみんな漁船りょうせんである。藤さんが何か考え込んで斜はすかいに坐っているとところが想われる。伴れに来た人は何にも言わないで、鼻の痘痕を小指の爪でせせくって坐っているような気がする。藤さんはどんな心持がしているであろう。どういう事からこんなに不意に伴れて行かれたのであろうか。小母さんのところに一と月もいたのはどうした故であらうかと、色んな事が一度に



考えられて、物足りないような、苛<sup>いらだ</sup>立たしい心持がする。船から隣村の岸までは、目で見てもここからこの前の岸までよりか遙に遠いけれど、まだ一里と乗り出してはいない。自分が畑に永くいさえしなかつたら、少くとも藤さんが出かけるところへなりと帰って来たであろうに。それともなぜはじめから出て行くのを止さなかつたらう。一しよにいる間は別に何とも思わなかつたけれど、こうなつて見れば、自分は何かしらあなたをいじらしく思うとくくらいは言つて置きたかつたような気がする。この儘<sup>まま</sup>で永く別れてしまうのは何だか物足りない。自分が

どんな気でいるかは藤さんは知ってははいまい。別れた後は元の知らぬ人と考えているように思っていてくれては張合がない。自分は何だかお前さんの事が案じられてならないのである。

このあたりの見渡しは、この時のみは何やら意味があるようであった。暮れて行く空や水や、ありやなしやの小島の影や、山や蜜柑畑や、森や家々や、目に見るものがことごと悉く、藤さんの白帆が私語ささやく言葉を取り取りに自分に伝えているような気がする。

と、ふと思わぬところにもう一つ白帆がある。かなた

の山の曲り角に、靄もやに薄れて白帆が行く。目の迷いかと  
 眸ひとみを凝こらしたが、やつぱり帆である。併しかし藤さんの船  
 は是非とも前からの白帆と定めたい。遠い分はよく見え  
 ぬ。そして、間もなく靄の中に消えてしまうのである。  
 よく見えて永く消えないのが藤さんの船でなければなら  
 ぬ。

はらはらと風もないのに松葉が降る。方々の機はたの音が  
 遠くの虫を聞くようである。自分は足もとのわが宿を見  
 下す。宿は小鳥の逃げた空籠のようである。離れの屋根  
 には木の葉が一面に積って朽くちている。物置の屋根裏で

鳩がぽうぽうと啼いている。目の前の枯枝から女郎蜘蛛じよろうぐもが下る。手を上げて袂はらい落そうとすると、蜘蛛はすらすらと枝へ帰る。この時袂の貝殻ががさと鳴る。今まで頓とんと忘れていたけれど、もうこの貝殻も持っていたつつまらないと思つて、一つずつ出しては離れの屋根を目がけて投げ附ける。屋根へ届くのは一つもない。みんな途中へ落ちる。落ちて木の葉が幽かすかに鳴る。今のは何とも答が無かつたと思うと、しばらくして思い出したようにばさというのがある。目を閉じて横の方へうんと投げて、どの見当で音がするか当てて見る。しなければするまで

投げる。しまいには三つも四つも握って無茶苦茶に投げる。とうとう袂の底には、からからの藻草の切れと小砂とが残ったばかりである。

再び白帆を見る。藤さんのはいつまでも一つとところにいる。遠くの分はもう亡くなっている。そして、近く岸の薄のはずれにこちらへ帰る帆がまた一つある。どこから帰ったのかとはじめは訝いぶかしむ。その内に、これは一番はじめのがこちらへ近づいたのではあるまいかと疑う。見る見る岸に近くなる。それでは藤さんの船だと思つたのは、こちらへ帰る船ではなかったらうか。今の藤

さんの船は、靄の中のがこちらへ出て来たのではあるまいか。自分はわが説が嘲りの中に退けられたように不快を感ずる。もしかなたの帆も同じくこちらへ帰るのだとすると、実際の藤さんの船はどれであろう。あちらへ出るのには今の場合は帆が利かぬわけである。けれども帆のない船であちらへ行くのは一つもない。右から左へ、左から右へと隈なく探しても一つもない。自分は気が苛立って来る。それでは先に靄の中へ隠れたのが藤さんのだ。そしてもう山を曲って、今は地方じがたの岬を望んで走っているのである。それに極きめねば収まりがつかない。無

理でもそれに違いない、と権柄けんぺいづくで自説を貫いて、そこそと山を下りおはじめる。

下りる途中に、先に投げた貝殻が道へぽつぽつ落ちて  
いる。綺麗な貝殻だから、未練にもまた拾って行きたくなる。  
あるだけは残らず拾ったけれどやっと、片手に充ちる程しかない。

下りて見ると章坊が淋しそうに山羊の檻おりを覗いて立っている。

「兄さんどこへ行つたの。」と聞く。

「おい、貝殻をやるうか章坊。」というと、素気なくい

らないと言う。

私は不意に帰らねばならぬ事と相なり候。わけは後  
でお聞きなさることと存候。容易にはまたとお目も  
じも叶<sup>かな</sup>うまじと存ぜられ候。あなたさまはいつまで  
も私のお兄さまにておわし候。静かに御養生なされ  
候ようお祈り申上候。おものも申さで立ち候こと本<sup>ほ</sup>  
意<sup>い</sup>なき限りに存じまいらせ候。何卒<sup>なにとぞ</sup>お許し下され度<sup>たく</sup>  
候。

これは足を洗いながら自分が胸の中で書いた手紙であ  
る。そして実際にこんな手紙が残してあるかも知れない



と思う。出ようとする間に、藤さんはとんとんと離れへ這入って行って、急いで一と筆さらさらと書く。母家<sup>おもや</sup>で藤さんと呼ぶ。はいと言いいい、あらあらかしくと書きおさめて、硯<sup>すずり</sup>の蓋を重しに置いて出て行く。——自分が藤さんなら、こんな時には是非とも何とか書き残して置く。行って見れば実際何か机の上に残してあるかも知れないという気がする。

併しやっぱりそんな手紙はなかった。

けれども、ふと机の抽斗<sup>ひきだし</sup>を開けて見ると、中から思わぬ物が出て来た。緋<sup>ひ</sup>の紋羽二重に紅絹裏<sup>もみ</sup>の附いた、一尺

八寸の襦袢の片袖が、八つに畳んで抽斗の奥に突っ込んであつた。もとより始めは奇怪な事だと合点が行かなかつた。別に証拠と言つては無いのだから、それが、藤さんが窃かひそかに自分に残した形見であるとは容易に信じられる訳もない。併し抽斗は今朝初やに掃除をさせて、行李から出した物を自分で納めたのである。袖はそれより後に誰かが入れたものだ。そしてこの袖は藤さんのに相違はない。小母さんや初やや、そんな二三十年前の若い女に今頃こんな花やかな物がある筈がない。果して藤さんが入れたのだとは断言出来ぬけれど、併しほかのものが

どう間違っただってこんな物を自分の抽斗へ入れ込む訳がない。藤さんのした事に極きまっている。そうすれば只ただうっかり無意味で入れたのではない。心あって自分にくれたのである。そう推定したって無理とは言えまい。自分は袖を翳して何だかほろりとなった。

しかし自分は藤さんについては遂にこれだけしか知らないのである。ああして不意に帰ったのはどういう訳であったのか、それさえとうと聞かないでであった。その後どこにどうしているのか、それも知らない。何にも知らない。

という和一寸合点が行かぬかも知れぬけれど、それは自分がわざわざ心配してこんな風にしてしまったのである。千鳥の話が大切なからである。千鳥の話とは、唾のお長の手枕にはじまって、絵に描いた女が自分に近よって、狐が鼬いたちほどになって、更紗の蒲団の花が淀よどんで、鮎が沈んで針が埋うずまって、下駄の緒が切れて女郎蜘蛛が下って、それから机の抽斗から片袖が出た、その二日の記憶である。自分は袖を膝の上に載せたまま、暗くなるまでじっと坐って色々な思いにくれた末、一番しまいにこう考えた。話は只この二日で終らなければ面白くない。

跡へ尾を曳いてはもう拙つまらないと考えた。或西の国の小島の宿りにて、名を藤さんという若い女に会った。女は水よりも淡き二日の語らいに、片袖を形見に残して知らぬ間にいなくなつて了つた。去つてどうしたのか分らぬ。それで沢山である。何事も二日に現れた以外に聞かぬ方がいい。もしや余計な事を聞いたりして、千鳥の話の中の彼女に少しでも傷が附いては惜しい訳である。こう思つたから自分はその夕方、小母さんや初やなどに会うのが気になつた。二人が何とか藤さんの身の上を語つて、千鳥の話を壊こわしはしまいかと気がもめた。

小母さんは帰って来るや否や、

「あなたお腹なかがすいたでしょう。私わが気きになつて急いで帰つたのでしたけど」と、初はつやにお菜さいの指さし図ずをして、

「これから当分は何だかさびしいでしょうね。全く不意にこんな事になつたのですよ。」と、そろそろ何か言ひ出しそうであつたから、自分はすぐ、

「あの豆腐屋の親爺さんは、どういふ気であんなに髯ひげを生やしているんでしよう。長い髯ひげですね。」と言つて、話の芽を枯らしてしまつた。

それ以来小母さんたちが一寸でも藤さんの事を言ひ出

すと、自分は忽たちまち二日の記憶を抱いて遁にげて行くのであった。どんな場合でもすぐ遁げる。どうしても遁げられない時には、一生懸命に他ほかのことを心の中で考え続けて、話は少しも耳へ入れぬようにしていた。後には、小母さんも藤さんの事は先方から避けて一切自分の前では言わなくなった。初やも言い含められでもしたのか、妙に藤さんの名さえも口に出さなかつた。二人で何とか考えての事かも知れないと思つたが、そんな事はどうでもよかつた。聞かされさえしなければいいのである。その後小母さんからよこす手紙にも、いつでも自分がいた頃

の事をあれこれ回想していながら、今に藤さんの話は垢あか程も書いては来ない。

以来永く藤さんの事は少しも思わない。よく思うのは思うけれど、それは藤さんを思うのではない。千鳥の話の中の藤さんを思うのである。今でも時々あの袖を出して見る事がある。寝附かれぬ宵なぞには必ず出して見る。この袖を見るには夜も更けぬと面白くない。更けて自分は袖の両方の角を摘つまんで、腕を斜に挙げて燈ともし火の前に釣つるす。赤い袖の色に灯影ほかげが浸み渡って、真中に焰が曇るとき、自分はそぞろに千鳥の話の中へ這入って、藤さ



んと一しよに活動写真のように動く。自分の芝居を自分で見るのである。始めから終りまで千鳥の話を詳しく見せてしまうまでは、翳す両手のくたぶれるのも知らぬ。袖を畳むとこう思う。この袂の中に、十七八の藤さんと二十ばかりの自分とが、いつまでも老いずに封じてあるのだと思う。藤さんは現在どこでどうしていても構わぬ。自分の藤さんは袂の中の藤さんである。藤さんはいつでももありありとこの中に見ることが出来る。

千鳥千鳥とよくいうのは、その紋羽二重の紋柄である。

(明治三十九年五月)



日本文学電子図書館

---

千鳥

著者：鈴木三重吉

制作者：宮澤一郎

底本：現代日本文學大系 29  
筑摩書房

昭和46年6月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館